Tsukuba Psychological Research
2008, **36**, 39-48

共感性プロセス尺度作成の試み[1)]

筑波大学大学院人間総合科学研究科　葉山　大地・植村みゆき[2)]・
萩原　俊彦・大内　晶子・及川千都子・鈴木　高志・倉住　友恵
筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科・心理学系　櫻井　茂男

Development of an Empathetic Process Scale

Daichi Hayama, Miyuki Uemura, Toshihiko Hagiwara, Akiko Ohuchi, Chizuko Oikawa, Takashi Suzuki, Tomoe Kurazumi and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Some problems remain with the classification of components in existing scales of empathy (e.g., Interpersonal Reactivity Index (Davis, 1983)). The purposes of this study are (1) to develop a new scale that measures empathy and (2) to examine the empathetic process as a human trait. In total, 265 college students (126 male, 138 female, and 1 unknown) completed the questionnaire. Analysis results classified empathy according to six factors: (1) sensitivity to other's affection, (2) perspective taking, (3) sharing of positive affections, (4) sharing of negative affections, (5) good feeling towards other's positive affections, and (6) sympathy towards other's negative affections. Gender differences and correlations with other scales indicate that this scale has sufficient validity. Both the alpha coefficient and the test-retest correlation are sufficiently high and confirm its reliability. Structural equation modeling (SEM) elucidates the empathetic process extending from a sensitivity to other's affection to good feelings towards other's positive affections and to sympathy towards other's negative affections.

Key words: empathy, sharing of affection, other-oriented response, empathic process

問題と目的

社会的生活において，他者の感情に気付き，適切に反応するためには共感性（empathy）が不可欠である。共感性に関する研究には長い歴史があり，膨大な研究知見が蓄積されている。しかしながら，既存の共感性尺度（例えば，Davis（1983）の対人的反応性指標）に含まれる共感性の構成要素には，再検討の余地が残っている点や，同情のしやすさ等の特性的な共感性の形成プロセスを実証的に検討した研究が少ない点が問題として挙げられる。本研究の目的は，共感性プロセスの各構成要素を測定する尺度を開発し，特性としての共感性のプロセスを検討することである。

本研究における共感性の定義

共感性の定義は，研究者の立場によって様々である。例えば，「他者の思考・感情・行為の中に自分自身を想像的に置き換えて，その人のあるがままの世界を構築すること（Dymond, 1948）」といった認知的側面を強調する定義（Dymond, 1948; Borke, 1971）と，「他者が経験しているか，または経験し

1）本研究は21世紀 COE プログラム「こころを解明する感性科学の推進」の研究費補助を受けた。
2）現在は関東学院大学法学部に所属する。

ようとしている情動状態を知覚したために，観察者にも生じた情動的な反応（Stotland, 1969）」といった感情的側面を強調する定義（Stotland, 1969; Batson, 1987）が存在する。

近年では，共感性の構成要素として認知的側面と感情的側面の両方を含める定義が主流となっている。例えば，Davis（1994）は共感性を「他者の経験についてある個人が抱く反応を扱う一組の構成概念」と包括的に定義している。また，鈴木・木戸・出口・遠山・出口・伊田・大谷・谷口・野田（2000）は「他者のポジティブ及びネガティブな経験（感情，欲求，知覚，思考，態度などの心理状態）について，推測から理解を経て反応へ至る心的傾向及び認知能力」という定義をしている。こうした流れを踏まえ，本研究でもDavis（1994）の包括的な定義を採用する。

既存の共感性尺度の概観及び問題点

前述のとおり，共感性を測定する尺度の代表としてDavis（1980, 1983）の対人的反応性指標が挙げられる。この尺度では，認知的側面として視点取得（他者の立場に立って物事が考えられる程度）と空想（小説，映画などの架空の世界の人と同一視する程度）が取り上げられ，感情的側面として共感的関心（他者に対して同情や配慮をする程度）と個人的苦痛（援助が必要な場面で動揺する程度）が含まれる。我が国においても桜井（1988）や明田（1999）がこの尺度を邦訳し，十分な信頼性・妥当性を確認している。

しかし，近年では，対人的反応性指標の問題として，共感性の4側面しか捉えていない点（鈴木ら，2000）や表現内容が日本文化においては不適切である点（登張，2003）が指摘されている。

感情的側面に関する問題点　従来取り上げられてきた個人的苦痛や共感的関心といった感情反応に関しても再検討すべき問題を以下に指摘する。

第1の問題点は，共感（empathy）と同情（sympathy）が混同されている点である。なお，この場合における共感とは，他者と同じ感情を持つという感情経験を指し，共感性とは区別する。対人的反応性指標における共感的関心は，「不運な他者への同情や関心という他者志向（other-oriented）の気持ち（Davis, 1983）」と定義されており，主として同情を強調した概念である。登張（2003）においても同様である。しかしながら，Eisenberg & Miller（1987）は共感（相手と同じ感情を持つこと）と同情とは異なる概念であると述べており，Batson（1991）も，同情は他者志向的な反応であるため共感と区別することが有益であると指摘している。さらに，出口・斉藤（1990）は「同情は他者のネガティブな感情状態を認知するだけでも想起するものであり，主体的な感情体験をしなくても起こる」と論じている。そもそも，日本語において，共感と同情は異なった意味を有している。例えば，仲島（2006）は，共感という日本語の成り立ちを述べ，共感を「他者の感情に対して同じ感情を持つこと」と定義するのが適当と結論づけている。

なお，感情の一致は，共感的関心（同情反応）と区別して，並行的共感（登張，2005）と呼ばれることもあるが，「共感」という用語は，同情や視点取得といった複数の構成要素を包括するため，感情の一致を特に「共感」と呼ぶと混乱を招く恐れがある。以上より，本研究では，他者との感情の一致を「感情の共有」と名付けることとする。

第2の問題点として，既存の尺度の多くが，共感の対象となる他者の感情状態を，悲しさや怒りというネガティブな感情にのみ焦点を当てている点である。杉山（1995）は，喜びに対する共感性と悲しみに対する共感性では発達過程に違いがあることを指摘しており，橋本（2005）も心理臨床の観点から，ポジティブな感情かネガティブな感情かによって心理臨床場面における共感性に違いが見られると報告している。こうした点から，感情の方向性を考慮する必要があるといえる。

感情の方向性を考慮すると，従来の研究においては十分に扱われてこなかった，ポジティブな感情への他者志向的反応を新たに想定できる。例えば，他者志向的反応として，喜びといった他者のポジティブな感情に対して誇らしさを感じる等の感情反応が挙げられる。

第3の問題点は，個人的苦痛を共感性に含めている点である。Davis（1983）や登張（2003）は，感情的側面として共感的関心と個人的苦痛の2つを取り上げているが，個人的苦痛は純粋な共感を測定するものではないという指摘がなされている（Baron-Cohen & Wheelwright, 2004）。例えば，Baron-Cohen & Wheelwright（2004）は，対人的反応性指標における個人的苦痛は，自己制御を測定するものであると論じている。個人的苦痛と自己制御の関連について，Eisenberg & Okun（1996）は，自己の情動的反応を許容範囲内で保つという自己制御ができない個人は過覚醒し，個人的苦痛を感じやすいと論じている。Baron-Cohen & Wheelwright（2004）は，彼らが作成したEmpathy Quotient Scale（EQ）において個人的苦痛を除外しているため，本研究においても共感性から個人的苦痛を除外するこ

ととする。

認知的側面に関する問題点　共感性の認知的側面として視点取得のほかに，空想（fantasy）が取り上げられている点も既存の尺度（Davis, 1983; 登張, 2003）の問題点といえる。例えば，Baron-Cohen & Wheelwright（2004）は，Davis（1983）の対人的反応性指標における空想尺度が想像力を測定するものであると論じている。また，小池（2003）は，対人的反応性指標に含まれるいくつかの項目（例えば「良い映画を見たときには，すぐに主人公の立場に自分を置くことができる」）は対人場面の共感性を測定するには不適切であると述べている。こうした点を考慮すると，空想は共感性と関連してはいるものの，個人的苦痛と同様に共感性そのものではないと考えられる。

一方，共感性の認知的側面として，他者の感情を読み取る能力が着目されている。例えば，Davis（1983）は視点取得の程度の高さは，自己意識や他者に対する関心によって媒介されている可能性を示唆している。また，三原（1998）は，「視点や役割をとるには，主体は相手になんらかの関心を持っていなければできない」と指摘し，他者意識（辻，1993）や対人的志向性（斉藤・中村，1987）を取り上げ，視点取得との関連を検討している。その結果，三原（1998）は，視点取得と内的他者関心行動傾向や内的他者関心意識傾向との間に正の相関がみられることを明らかにした。また，小池（2003）は，内的他者意識（得点が低いほど他者意識が高いことを表す）と認知的共感との間に有意な負の相関があることを報告している。近年，浮谷（2005）は，共感性として「相手の態度から感情を読み取ることが出来る」等の「他者を察知できる」能力を取り上げていることから，本研究でも，視点取得に加えて，他者の感情に関心を持ち敏感に察知する傾向を共感性の認知的側面に含めることとする。

共感性の構成要素とプロセス

上記の問題点を考慮し，本研究においては，共感性の認知的側面として，“他者の感情に対する敏感性”（他者の感情に関心を持ち，注意を向ける傾向）と“視点取得”（相手の立場に立って，相手の感情を理解する傾向）を取り上げる。また，感情的側面として，“ポジティブな感情の共有”（他者のポジティブな感情と同じ感情を持つ傾向），“ネガティブな感情の共有”（他者のネガティブな感情と同じ感情を持つ傾向），“ポジティブな感情への好感（他者のポジティブな感情に対する他者志向的反応を持つ傾向）”，“ネガティブな感情への同情（他者のネガティブな感情に対する他者志向的反応を持つ傾向”を取り上げる。

また，本研究においては，上記の共感性の構成要素を一連のプロセスとして扱う。共感性をプロセスとして捉える試みとしては，Davis（1994）の組織的モデルが挙げられる。組織的モデルとは，特定の状況下での状態的な共感の生起プロセスを検討するモデルであり，状況や特性的な能力の個人差に関する「先行条件」，視点取得等の共感的な結果を含む「過程」，並行的共感や応答的共感を含む「個人内的な結果」，そして援助行動等の「対人的な結果」という水準から構成される。本研究の試みは，「先行条件」にあたる特性的な共感性をプロセス的に捉えるものであり，組織的モデルをそのまま適用することはできないが，援用は可能であると考えられる。

本研究におけるモデルの全体的枠組みとして，組織的モデル（Davis, 1994）を基に，認知的側面から感情的側面へのプロセスを想定する。認知的側面におけるプロセスとしては，視点取得の先行条件として他者の感情状態の手がかりを捉えることの重要性が示唆されている点（Davis, 2005）やDavis（1983）や三原（2003）の指摘に基づき，他者感情への敏感性から視点取得へのパスを想定する。また，視点取得から感情の共有へのパスを想定する。その理由として，視点取得等の認知的過程の結果として感情反応が起こることはしばしば指摘されているからである（Hoffman, 2000; Davis, 2005; 登張, 2005）。

感情的側面においては，感情の共有は他者志向的反応に先行することが想定される。Hoffman（2000）は，共感的苦痛から同情的苦痛へと変換することを論じている。同情的な苦痛を感じることはその背後に相手と同じ悲しみを共有するという過程を経ているのである。Hoffman（2000）の議論を踏まえると，同情といった他者志向的反応の先行要因として感情の共有を想定することが可能であろう。一方，出口・斉藤（1990）は，他者に共感したのち同情へと発展するだけでなく，単に相手の感情状態を認知しただけでも同情が起こる可能性を示唆しているため，感情が一致するという経験に基づかずに，視点取得が他者志向的反応に影響を及ぼすパスも想定する。

これらの想定を総合し，「他者に対する敏感性が視点取得に先行し，こうした認知的側面が感情的側面に影響を及ぼす。感情の共有が他者志向的反応に先行する一方，感情の共有を経ずに認知的な構成要素から他者志向的反応に直接的な影響が見られる」というモデルを想定する。

本研究の目的

以上の観点から，本研究の目的は以下の2点とする。第1点として，共感性の各構成要素を測定する共感性プロセス尺度を作成し，信頼性と妥当性を検討する。併存的妥当性と構成概念妥当性の検討のため，新性格検査（柳井・柏木・国生，1987）の共感性下位尺度及び社会的スキル尺度（菊池，1988）との関連を吟味する。また，先行研究（Hoffman, 1977; Baron-Cohen & Wheelwright, 2004; 若林・バーロン－コーエン・ウィールライト，2006）において，感情的共感性は男性よりも女性の方が高いことが示されているため，構成概念妥当性の検討の一環として性差を検討する。第2点として，本研究で想定した特性的な共感性プロセスを検討する。

方　法

調査対象者　大学生265名（男性126名，女性138名，不明1名）を対象とした平均年齢19.52歳（*SD*＝1.30））であった。

調査内容　調査内容は以下のとおりであった。

①共感性プロセス尺度：共感性プロセスを構成する「他者感情への敏感性」「視点取得」「感情の共有」「他者志向的反応」の4つの水準を設定した。

尺度作成にあたり，多次元共感性尺度（桜井，1988），共感性尺度（出口・斉藤，1990），多次元共感性尺度（鈴木ら，2000），青年期用多次元的特性共感尺度（登張，2003），共感経験尺度（橋本，2005），他者意識尺度（辻，1993）を基に，91項目の原案を作成・収集した。さらに心理学を専攻する大学院生5名による内容的妥当性の検討を行い，最終的に，64項目を採用した。これらの項目について，「まったく当てはまらない（1点）」，「あまり当てはまらない（2点）」，「どちらともいえない（3点）」，「やや当てはまる（4点）」，「とても当てはまる（5点）」の5件法で回答を求めた。逆転項目はこの反対で得点化される。

②新性格検査のうちの共感性下位尺度（柳井ら，1987）：共感性を測定する尺度である（10項目）。回答は「いいえ（1点）」～「はい（3点）」の3件法であった。

③社会的スキル尺度（菊池，1988）：社会的スキルを測定する18項目であり，回答は「いつもそうでない（1点）」～「いつもそうだ（5点）」の5件法であった。

手続き　講義が終了した後に，学生の了解を得て実施した。

結　果

共感性プロセス尺度の因子分析　共感性プロセス尺度の因子構造を検討した。まず，「他者感情への敏感性」においては，一次元構造を仮定しているため，成分数を1に設定し，主成分分析を行った。その後，項目を精選するために，負荷量の大きい順に5項目を抽出し，再度主成分分析を行った（Table 1）。その結果，全ての項目が第1主成分に.70以上の負荷を示し，累積寄与率が74.30％となり，一次元性が確認された。

同様に「視点取得」においても，成分数を1に設定し，主成分分析を行った。その後，負荷量の大きい順に5項目を抽出し，再度主成分分析を行った（Table 2）。その結果，「人のちょっとした気分の変化に敏感である」等の項目がすべて第1主成分に.70以上の負荷を示し，累積寄与率が66.23％となり，一次元性が確認された。

「感情の共有」水準に含まれる17項目について，因子分析（主因子法，promax回転，以下すべて同様であるため記載は省略する）を行った。固有値の推移と因子の解釈のしやすさから，2因子が妥当であると判断した。因子数を2に設定し，再び因子分析を行った。その結果，当該因子に負荷量が.40以下の項目，ならびに複数の項目に.40以上の高い負荷を示す項目を削除した。その後，項目を精選するために，各因子に高い負荷を示す5項目を取り上げ，再度，因子分析を行った（Table 3）。その結果，第1因子は，「他の人が嬉しそうにしているのを見ただけで，自分も嬉しくなる」等の相手のポジティブな感情と同じ感情を持つことを示す項目が高い負荷を示したため，「ポジティブな感情の共有」と命名した。第2因子は，「悲しんでいる相手といても，自分はその人のように悲しくならないほうだ（逆転項目）」等の他者のネガティブな感情と同じ感情を持つことを示す項目が高い負荷を示していたため，「ネガティブな感情の共有」と命名した。

「他者志向的反応」水準に含まれる15項目について，因子分析を行った，固有値の推移と因子の解釈のしやすさから，2因子が妥当であると判断した。因子数を2に設定し，再び因子分析を行った。当該因子に負荷量が.40以下の項目，ならびに複数の項目に.40以上の高い負荷を示す項目を削除した。その後，項目を精選するために，各因子に高い負荷を示す5項目を取り上げ，再度，因子分析を行った（Table 4）。その結果，第1因子は，「人が悲しんでいると，かわいそうだと思う」等の相手のネガティブな感情に対する反応を示す項目に高い負荷を示し

Table 1 「他者感情への敏感性」水準に対する主成分分析結果

	成分
27. 人のちょっとした気分の変化に敏感である。	.91
37. 人の心の動きに敏感である。	.90
70. 他者のちょっとした表情の変化に気がつくほうだ。	.88
65. 他者の心の動きに気を配るほうだ。	.83
54. 他者の態度や表情を気をつけてみるようにしている。	.78
累積寄与率	74.30(%)

注）$\alpha = .91$

Table 2 「視点取得」水準に対する主成分分析結果

	成分
68. 他者をよく理解するために，相手の立場になって考えようとする。	.86
49. 相手の立場に立って，その人の感じている不安を理解するようにしている。	.85
34. 相手が悲しんでいるときに，相手の立場に立って理解しようとするほうである。	.81
3. なぜ相手が笑っているか，その人の気持ちに立って理解するようにしている。	.79
14. 相手の視点に立って，その人が感じている楽しさを理解するようにしている。	.75
累積寄与率	66.23(%)

注）$\alpha = .87$

Table 3 「感情の共有」水準に対する因子分析結果（主因子法・promax 回転）

	因子 1	因子 2
下位尺度：ポジティブな感情の共有（α＝.88）		
41. 他の人が嬉しそうにしているのを見ただけで，自分も嬉しくなる。	.88	−.05
11. 相手が喜んでいると，自分も嬉しくなる。	.82	−.05
19. 相手がとても幸せな体験をしたことを知ったら，私までうれしくなる。	.80	.01
52. 相手が何かに喜んでいても，自分はうれしい気持ちにならないほうだ（＊）	.66	.09
59. まわりが楽しそうだと自分まで楽しくなってくる。	.64	.07
下位尺度：ネガティブな感情の共有（α＝.84）		
48. 悲しんでいる相手といても，自分はその人のように悲しくならないほうだ（＊）	−.04	.82
9. まわりに悲しんでいる人がいても，自分まで悲しくなることはない。（＊）	−.08	.74
12. 悲しんでいる人と一緒にいると，その人の悲しみが自分のことのように感じる。	.09	.70
17. 相手が何かに苦しんでいても，自分はその苦しさを感じないほうだ。（＊）	.05	.67
53. 相手が不安を感じていると，自分も同じ気持ちになる。	.09	.62
因子間相関	.58	

注）（＊）は逆転項目を示す。

ていた。そのため「ネガティブな感情への同情」と命名した。第2因子は，「成功して喜んでいる人を見ると，相手をほめたくなる」等の相手のポジティブな感情に対する反応を示す項目が高い負荷を示していた。そのため「ポジティブな感情への好感」と命名した。

因子分析で得られた結果に基づき，因子ごとに項目の平均を算出し，下位尺度得点とした。各下位尺度における平均値及び標準偏差，相関係数を Table 5 に示す。

共感性プロセス尺度の信頼性の検討　共感性プロセス尺度の信頼性を確認するために，各 Table に示された項目により下位尺度を構成し，それぞれα係数を算出した。その結果，α係数は.83 ～.91の範

Table 4 「他者志向的反応」水準に対する因子分析結果（主因子法・Promax 回転）

	因子 1	因子 2
下位尺度：ネガティブな感情への同情（α＝.83）		
57. 人が悲しんでいると，かわいそうだと思う。	**.83**	.01
56. いじめられている人を見ると，かわいそうで胸が痛くなる。	**.82**	−.11
13. 人が冷たくされているのを見ると，かわいそうになる。	**.79**	−.06
42. ニュースで災害にあった人などを見ると，同情してしまう。	**.54**	.08
24. 他人が失敗しても同情することはない。（＊）	**.51**	.10
下位尺度：ポジティブな感情への好感（α＝.84）		
51. 成功して喜んでいる人を見ると，相手をほめたくなる。	−.03	**.77**
47. 他の人が幸せそうにしている光景を見ると，暖かい気持ちになる。	.06	**.74**
30. 喜んでいる人を見ても，あまり祝おうとは思わない。（＊）	.00	**.73**
23. 成功している人に対して，素直に祝いたい。	−.14	**.69**
60. 楽しそうな人が一緒にいると，ほほえましい気持ちになる。	.19	**.65**
因子間相関	.42	

注）（＊）は逆転項目を示す。

Table 5　共感性プロセス尺度の項目平均・標準偏差および下位尺度間の相関係数

	平均	*SD*	下位尺度間の相関 1	2	3	4	5	6
1．他者感情への敏感性	3.69	.89	−					
2．視点取得	3.53	.73	.48**	−				
3．ポジティブな感情の共有	3.59	.75	.20**	.45**	−			
4．ネガティブな感情の共有	3.25	.76	.40**	.48**	.52**	−		
5．ポジティブな感情への好感	3.69	.70	.14*	.42**	.83**	.39**	−	
6．ネガティブな感情への同情	3.77	.68	.30**	.46**	.40**	.62**	.39**	−

注）$n=265$. $^{**}p<.01$, $^{*}p<.05$.

Table 6　他の尺度との相関係数，再検査信頼性，および性差の検討

下位尺度	新性格検査共感性（$n=123$）	社会的スキル（$n=142$）	再検査信頼性（$n=40$）	性差 男性（$n=126$）平均	男性 *SD*	女性（$n=138$）平均	女性 *SD*	*t* 値	
他者感情への敏感性	.53**	.26**	.79**	3.61	.95	3.76	.83	1.37	
視点取得	.51**	.34**	.76**	3.47	.77	3.58	.69	1.19	
ポジティブな感情の共有	.21*	.37**	.83**	3.41	.81	3.75	.66	3.80**	男＜女
ネガティブな感情の共有	.53**	.13	.80**	3.09	.81	3.39	.70	3.18**	男＜女
ポジティブな感情への好感	.11	.30**	.89**	3.56	.77	3.82	.62	2.96**	男＜女
ネガティブな感情への同情	.48**	.16*	.75**	3.67	.76	3.86	.60	2.33**	男＜女

注）$^{**}p<.01$, $^{*}p<.05$.

囲であった。さらに，一部の回答者（$n=40$）に対して，約1ヶ月の間隔を置き，再検査信頼性の検討を行なった（Table 6）。その結果，全下位尺度において1回目の回答と2回目の回答との間に非常に強い相関（$r=.75$〜$.89$）が示された。

共感性プロセス尺度の妥当性の検討　共感性プロセス尺度の併存的妥当性の検討のために，新性格検査（柳井ら，1987）の共感性下位尺度との間の相関係数を算出した（Table 6）。その結果，ポジティブな感情への好感を除く全ての下位尺度において，有意な正の相関が示された。

次に，構成概念妥当性を検討するために，社会的スキル尺度（菊池，1988）と相関係数を算出した（Table 6）。その結果，ネガティブな感情の共有を除き，他の5つの下位尺度において，有意な正の相関（$r=.16$〜$.37$）が示された。感情的側面に関して，ポジティブな感情に対する感情反応（$r=.30$〜$.37$）が，ネガティブな感情に対する感情反応（$r=.13$〜$.16$）よりも相関係数が高かった。

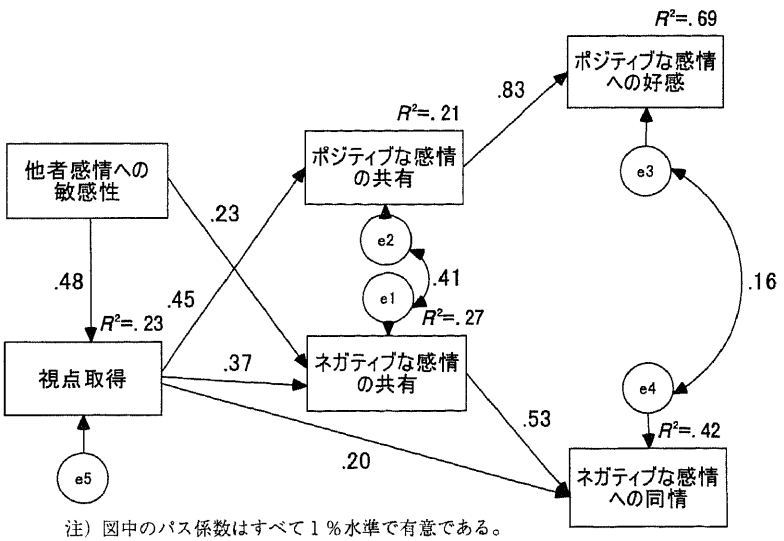
さらに，構成概念妥当性を確認するために，性差の検討を行った（Table 6）。t検定の結果，ポジティブな感情の共有，ネガティブな感情の共有，ポジティブな感情への好感，ネガティブな感情への同情において，女性は男性よりも得点が高いことが示された。その一方で，共感性の認知的側面に含まれる他者感情への敏感性と視点取得においては性差はみられなかった。

共感性プロセスモデルの検討　共感性プロセスについて，「他者感情への敏感性」水準が「視点取得」水準に影響を及ぼし，さらに「感情の共有」水準を経て「他者志向的反応」水準に影響を及ぼすというモデルを設定し，構造方程式モデルリング（SEM）によるパス解析を行った（Fig. 1）。その結果，本モデルの適合度指標は，GFI=.990，AGFI=.965，RMSEA =.036となり，本モデルはデータと十分に適合していることが示された。本モデルにおいて，他者感情への敏感性から視点取得，ポジティブ及びネガティブな感情の共有を経て，ポジティブな感情への好感とネガティブな感情への同情という，それぞれの感情に対応した他者志向的反応へと至るパスが示された。また，視点取得からネガティブな感情への同情へ正のパスが示された。なお，探索的なパスの検討を行なった結果，他者感情への敏感性からネガティブな感情の共有に対して有意な正のパスが見られた。

考　察

本研究の目的は，新たに共感性プロセス尺度を作成し，その信頼性と妥当性を検討すると共に，特性的な共感性のプロセスを検討することであった。

共感性プロセスの構成要素　本研究において，共感性の6つの構成要素を測定する尺度の作成を試みた結果，社会的スキルや他の共感性尺度との間にほぼ予想された結果が得られたため，妥当性がほぼ確認されたと考えられる。例えば，社会的スキルとの関連において，ネガティブな感情の共有よりポジティブな感情の共有のほうが強い相関が見られ，弁



注）図中のパス係数はすべて1％水準で有意である。

Fig. 1　共感性プロセスモデル

別的な結果が得られた。この結果は，橋本（2005）の結果と一致するものであり，ポジティブな感情へ適切に感情反応をすることが社会的な生活を行う上で必要なスキルである可能性が示唆された。また，新性格検査（柳井ら，1987）の共感性下位尺度との相関において，ポジティブな感情に関する下位尺度よりもネガティブな感情に関する下位尺度との相関がより強い傾向が示され，社会的スキルとの関連と同様に弁別的な結果であった。これは新性格検査の共感性下位尺度がネガティブな感情に関する項目を多く含んでいたためと考えられる。本研究で得られた感情的側面においてのみ女性の得点が男性よりも高いという結果は，先行研究（Baron-Cohen & Wheelwright, 2004；若林ら，2006）の知見を支持するものであった。女性の方が男性よりも共感性が高いという結果はかなり普遍的なものであると言えよう。

また，信頼性については内的一貫性と時間的安定性が確認されたといえる。近年，Davis（1983）の提唱した構成要素だけでなく，異なる構成要素を取り入れる必要性が指摘されており（鈴木ら，2000；登張，2003），本尺度はこうした指摘に応えた意義のある尺度といえよう。ただし，ポジティブな感情の共有とポジティブな感情への好感の下位尺度間相関が$r=.83$と非常に強い値となっており，今後はこれらの概念の相違をより詳細に検討する必要があるだろう。

共感性プロセスモデルの検証　本研究において提案されたモデルを検証した結果，想定したとおり，他者感情への敏感性から視点取得，ポジティブ及びネガティブな感情の共有を経て，それぞれの感情に対応した他者志向的反応へと至るパスが示された。先行研究（Hoffman, 2000）において，視点取得といった認知的共感が感情的共感に影響を与えると論じられており，本研究でもこれを支持する結果となった。また，Davis（1983）や三原（1998）が示唆したように，他者の感情に敏感な人は，他者の視点に立って物事を考えることができるといえよう。その結果，他者と同様の感情を感じる傾向につながり，他者の感情の種類に応じて好感や同情といった反応を示しやすいと考えられる。さらに，本研究においては，視点取得からネガティブな感情への同情に対し，正のパスが示された。この結果は，感情状態を認知するだけでも同情が起こると論じた出口・斉藤（1990）の指摘を支持するものである。

また，本研究においては，モデルの探索的検討を行なったところ，他者の感情に対する敏感性からネガティブ感情の共有に対し，直接の正のパスが示された。他者の感情に対して敏感な人は，相手の立場や考え方を推察するというプロセスを介さずに，他者と同様のネガティブな感情を感じる傾向にあることが示されたわけである。。他者の感情に敏感な人は他者の感情に巻き込まれやすく，相手の考え方の推察といった認知的作業を行う前に，相手の感情と並行した感情を示しやすい可能性が指摘できる。

本研究の課題と今後の展開　本研究のモデルにより，ポジティブな感情に関するプロセスと，ネガティブな感情に対するプロセスは異なることが示唆された。こうした点を考慮すると，他者のポジティブな感情に対しては他者志向的な感情反応を持つが，ネガティブな感情に対しては他者志向的反応を持てないという場合も想定できる。したがって今後は，この点を詳細に検討していく必要があろう。

さらに，発達的な観点からプロセスを検討することも望まれる。この点について斉藤（1999）は，青年期初期から後期（中学生～大学生）における共感性の発達プロセスの検討が不十分であると述べ，共感性を構成している次元を明確にして，次元間の変数の変化として発達を捉えることが重要であると指摘している。また，登張（2003）はDavis（1983）の共感性の枠組みを用いて青年期の共感性の発達を検討しているが，共感性の次元を再検討する必要があることを述べている。共感性プロセス尺度は，こうした発達的変化を捉えるという点でも有用であろう。

本研究で作成した共感性プロセス尺度には課題も残されている。第1の課題として，共感性プロセス尺度に含まれる項目の表現の改善が望まれる。例えば，項目間で表現が統一されていない点が挙げられる。他者を表す単語として，「人」「他者」など複数の言葉が使用されている。また，「ニュースで災害にあった人などを見ると，同情してしまう。」など，善悪の価値を含有する項目も存在した。さらに，ネガティブな感情の共有において逆転項目が過半数を占めていた点も問題である。

第2の課題として，妥当性のさらなる検討が挙げられる。本尺度では，一定の妥当性は示されたものの，ポジティブな感情への好感と新性格検査の共感性下位尺度との相関が有意ではなく，併存的妥当性が十分であるとは言えなかった。今後は，共感性と関連すると論じられている向社会的行動や援助規範意識といった変数との関連を検討することが望まれる。

引用文献

明田芳久（1999）．共感の枠組みと測度：Davisの共感組織モデルと多次元的共感性尺度（IRI-J）の予備的検討．上智大学心理学年報，**6**，19-31.

Baron-Cohen, S. & Wheelwright, S. (2004). The Empathy Quotient: An investigation of adults with asperger syndrome or high Functioning autism, and normal sex differences. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **34**, 163-175.

Batson, D.D. (1987). Prosocial motivation: Is it ever truly altruistic? In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, New York: Academic Press. pp.65-122.

Batson, C.D. (1991). *The altruism question: Toward a social-psychological answer.* Hillsdale, N.J: Erlbaum.

Borke, H. (1971). Interpersonal perception of young children; Egocentrism or empathy. *Developmental Psychology*, **5**, 262-269.

出口保行・斉藤耕二（1990）．共感性尺度の因子分析的研究　東京学芸大学紀要，**41**，183-199.

Davis, M.H. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, **10**, 85.

Davis, M.H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.

Davis, M.H. (1994). Empathy. A social psychological approach. Westview Press.（菊池章夫（訳）（1999）．共感の社会心理学　川島書店）

Davis, M.H. (2005). "Constituent" Approach to the study of perspective taking: What are its fundamental elements? In B.F. Malle, & S.D. Hodges (Eds.), *Other minds: how humans bridge the divide between self and others*, Gilford. pp.44-55.

Dymond, R.F. (1948). A preliminary investigation of the relation of insight and empathy. *Journal of Consulting Psychology*, **12**, 127-133.

Eisenberg, N. & Fabes, R.A. (1992). Emotion, regulation, and the development of social competence. In M.S. Clark (Ed.), *Review of Personality and Social psychology: Vol14, Emotion and Social Behavior*, pp.119-150.

Eisenberg, E. & Miller, P.A. (1987). Empathy and prosocial behavior. *Psychological Bulletin*, **101**, 100-131.

Eisenberg, E. & Okun, M.A. (1996). The relations of dispositional regulation and emotionality to elder' empathy-related responding and affect while volunteering. *Journal of Personality*, **64**, 157-183.

橋本秀美（2005）．肯定・否定感情に着目した共感性尺度の開発　心理臨床学研究，**22**，637-647.

Hoffman, M.L. (1977). Sex differences in empathy and related behaviors. *Psychological Bulletin*, **84**, 712-722.

ホフマン，M.L 菊池章夫・二宮克美（訳）（2001）．共感と道徳性の発達心理学　思いやりと正義とのかかわりで　川島書店（Hoffman, M.L. (2000). *Empathy and moral development Implications for caring and justice*. Cambridge University Press.）

菊池章夫（1988）．思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル　川島書店.

小池はるか（2003）．共感性尺度の再構成　－場面想定法に特化した共感性尺度の作成－　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，**50**，101-108.

三原　亘（1998）．共感性尺度の認知的側面に関する一研究　性格心理学研究ショートレポート，**6**，152-153.

仲島陽一（2006）．共感の思想史　創風社.

斉藤和志・中村雅彦（1987）．対人的志向性尺度作成の試み　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**34**，97-109.

斉藤耕二（1999）．青年期における共感性の発達（2）白百合女子大学研究紀要，**34**，173-186.

桜井茂男（1988）．大学生における共感と援助行動の関係　－多次元共感想定尺度を用いて－　奈良教育大学紀要，**37**，149-153.

鈴木有美・木戸和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲・大谷福子・谷口ゆき・野田勝子（2000）．多次元共感性尺度作成の試み　名古屋大学教育学部紀要，**47**，269-279.

杉山憲司（1995）．共感性と愛他行動の発達　二宮克美・繁多進（編）たくましい社会性を育てる　有斐閣選書，pp.69-82.

登張真稲（2000）．多次元的視点に基づく共感性研究の展望　性格心理学研究，**9**，36-51.

登張真稲（2003）．青年期の共感性の発達：多次元

的視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148.

登張真稲 (2005). 共感喚起過程と感情的結果, 特性共感の関係 －性の類似度, 心的重なりの効果, パーソナリティ研究, **13**, 143-155.

Stotland, E. (1969). Exploratory investigation of empathy. In L.Berkowiz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, **14**, pp.271-314.

辻平治朗 (1993). 自己意識と他者意識 北大路書房.

浮谷秀一 (2005). EQ測定のための基礎的研究 －共感性と表情との関連－ 日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集, pp.173-174.

若林明雄・サイモン バーロン－コーエン・サリー ウィールライト (2006). Empathizing－Systemizing モデルによる性差の検討 － Empathizing 指数 (EQ) と Systemizing 指数 (SQ) による個人差の測定 心理学研究, **77**, 271-277.

柳井晴夫・柏木繁夫・国生理恵子 (1987). promax 回転法による新性格検査の作成について (1) 心理学研究, **58**, 158-165.

(受稿3月21日：受理5月7日)